

特 殊 幼 児 の 保 育

出席者	一子	栄祝	島辺	中渡	彦子	幸子	藤木	斉横
	子	順	田	水	子	マ	水	清
	子	紀	島	川	子	ス	木	関
	子	杜	井	河	子	光	守	青
	子	祥	野	佐	真	治	田	津
	子	恵			子	秀		本
司 会					和			

本田 きょうは「特殊幼児の保育」というようなことで話合いの時をもたせていただきたいと考えております。特殊な幼児―特殊という言葉がいいかどうか、これもいろいろ問題があるかもしれませんけれども―とにかく、普通のお子さんなんだけれども、ある部分に特殊な傾向をもっている、たとえば他人との関係が非常につきにくい傾向をもっているとか、聞く力、あるいは見る力とか、そういうことが一般に欠けている。まあそういうような子どもたちに接しておいでの方から、お話をうけたまわりしたいと思います。

この「幼児の教育」では、そういう子どもたちのことを、特に保育の問題をどう考えていくかを編集の一つの柱としておりまして、そういうところでご執筆いただいた先生方も幾人かお加わりいただいているわけです。

まず一応簡単に自己紹介と、今までどういうお子さんをおあずかりになっ

◆ 座 談 会

か、特にどういふことをお話いただけるか、ちょっとお話ししましょうか。中島先生から順にお願いいたします。

す。昨年度七名、今年度は二名、そんなところですので、むしろ普通幼稚園に願っていたのです。

結局、私たちの力、家庭の力、幼稚園

中島 ぼくは横浜の東小学校の難聴教室

の力、それから特殊な症例ではお医者さ

におります。実は、難聴の幼児はなかなか普通幼稚園に入れていただけなくて、幼稚園の先生方とどういふふうにしたらいいか、ということ勉強してきたわけです。

んの力と、この四者が一体に結びついた時に、その子にとって一番プラスなことができるんじゃないか。その重要な柱である幼児教育を、いかにしてうけさせるか、それを私たちの方からお願ひしつづけてきたわけです。

斉藤 同じく斉藤です。横浜では昭和三十

青木 附属幼稚園の青木です。私は今ま

十九年に言語障害児の教室を作りまして、そこで言語障害児一般を扱っていたのです。それで昭和四十二年に東小学校に新しい教室を作ったわけですが、施設の關係上聴覚障害児が主力をしております。私たちの立場からすれば、「ガン」ではないんですが早期発見、早期治療が言語障害児にもいえることなんだと強く主張してきたんですが、市立の小学校に設置されているものですから主力は小学生で、余裕をみて幼児を扱ってきていま

で担任としてこういう子どもをもったことはないんですけれども、ここの幼稚園の役割として、そういう子どもたちも含めていかなければいけないんじゃないか、またそうしたいという気持はあります。文字の上だけじゃないそういう保育の實際を伺いたいと思っております。

殊な一先生方から見ればまことにせいたくなことかもしれないが一子どももあり、まあそういう意味で特殊な幼児というものも考えさせていたきたいと思っております。

河井 今までうちの幼稚園で保育をしておりまして、そこでそういう子どもに出会って、その楽しさを非常に強く感じました。

横浜の中島先生と反対に、うちでうけられたお子さんたちを、さて小学校に出そうとすると、どこでもうけられてくれない。十二月の終わりごろから三学期にかけては、そのこととたび回らなくちゃいけない、毎年それをくり返しているわけですね。ですから幼稚園と小学校はそういうところでもっと關係をつけて、保育の内容、小学校の教育の内容も考えなくちゃいけないところまでくるんじゃないか。

それから、ああいう子どもたちを見てみると、何をしなければならなかった

いうことが本当に教えられるような気がしたわけです。ですから、力がないなら、余計にあの子どもたちをうけいなくてやらないといけないんじゃないかと思えました。いろいろな幼稚園で二組に一人でもいいから、とってくれたらと、きょうはどうしてもそれをいいたいと思ってきました。

本田 河井先生は今年からこの幼稚園の方にいらしたんですが、今までは鎌倉のご自宅の幼稚園で、今お話しのような保育をつづけていらっしゃった方です。
佐野 津守研究室の佐野です。静岡大学で特殊教育を勉強してきましたが、現場の経験は全然ありません。きょうは記録係をさせていただき、私自身の勉強にしたいと思っています。

渡辺 私は去年一年自閉症の子どもをあまり閉症について勉強していません。実際の場におつきりまして、いろいろな障害はありますが、どうやら普通の小学

校の特殊学級にいらしていただきました。でも、四月になってその小学校に見学に行きましたら、非常におそまつなんですね、内容が。特殊学級といいますが、難聴とか、その他症状によって、ぜいたくな話ですがクラスがいろいろできたら、どんなにめぐまれた教育ができるのではないかと思います。現在は言語障害のお子さんを扱っておりますのでよろしくお願ひします。

横木 横浜のみこころ幼稚園の横木と申します。三年前に始めて、軽いちえおくれのお子さんと自閉的傾向のお子さんともおつきりしました。私考えますのに、担任の教師が一人でやつきになっても、どうにもならないような気持を、最近味わっております。一番大事なことは、幼稚園自身

の姿勢だと思えます。園長はじめ職員全部がその気持にならなければむずかしい、ということでも、幼児教育って苦しい気持も多少味わっているんですけども、幼児教育って

事にしていきたい。そのためには、人間というのはいろんな意味で恵まれた人ばかりではないんだ、ということをおさいうちから身につけて、思いやりとかそういうものを遊びの中で教えていくために、どんなうけいれたいと思うのです。けれども私立というのはいろんな意味でなかなかむずかしいものがあります。何か大きな力が働いてほしいと思っております。

津守 私は津守です。どうもこのごろ、幼稚園に入れてもらえない子どもがふえつつあるような気がして、気がかりになってしかたがありません。それから、実際に障害児を幼稚園全体がいっしょになつてやっていけるのか、ということに大変関心をもっております。

川島 津守先生とごいっしょに、愛育研究所でもちえ遅れのお子さんたちの保育を行なっております。
清水 音羽幼稚園の清水でございます。私がどうして障害児に関心をもち始めた

◆ 座 談 会

かと申しますと、私が小学校へあがるころに近所にオシのお子さんがおりまして、ある日突然物かげから出てきました。

ではないか、という見通しのもとにお入れしたわけでございます。

場からは小学校へ入れる時に大変苦労されたということが出てまいりました。それで、どういうきっかけでこういう子どもたちが皆さんの園に入ってくるようになったのか、その辺のことをお願いいたします。

て、私をこう、ぶつようなかつこうをいたしました。私は大変こわくて、弟の手をひっぱって逃げ帰ったのですが、そのお子さんの手がとてもすっばいにおいがしました。その恐怖感が強烈だったの

今年、その内の一人が卒園いたしました。小学校にあげりました。脳性マヒで下半身がマヒしているので、苦勞のち特別な学校にお願いしたのですが、幼稚園の時より大変疲れがひどいということ

それで、いろんなことを申しあげてなんですが、そのお子さんは軽度の身体障害なんです。軽度のお子さんはどういうか、私には頭が小さくて、三年生の年齢なのに、三歳児のクラスに入れても小さいようなお子さんが入ってきて、それが最初の出会いだったんですけれど、あとは愛育研究所の方からいろんなお子さんがまわってきたり……。うちでも専門の勉強をしておりますので不安で、必ずどこかで管理していただくという約束で、

で、障害児に関心をもつようになったのは、そんなところに遠い原因があるんじゃないかと思えます。

それで、いろいろなことを申しあげてなんですが、そのお子さんは軽度の身体障害なんです。軽度のお子さんはどういうか、私には頭が小さくて、三年生の年齢なのに、三歳児のクラスに入れても小さいようなお子さんが入ってきて、それが最初の出会いだったんですけれど、あとは愛育研究所の方からいろんなお子さんがまわってきたり……。うちでも専門の勉強をしておりますので不安で、必ずどこかで管理していただくという約束で、

大きくなつてから思いましたところでは、幼い子どもたちにとつて、こういうお子さんは異様にうけとられるというのはいけくないんじゃないか、特別に扱うということは大変いけないことなんじゃないか、と考え始めたんでございます。

私のお子さんをいれているわけですが、きょうまで二人ばかりそういうお子さんをお入れしました。お入れすること

愛育研究所で家庭指導グループを担当しております、水田でございます。いま、うけたまわっております、中島先生、斎藤先生の方から普通児の幼稚園へ入れてもらうのにはどうしたらいいかという問題、それから逆のお立

が他のお子さんのためにプラスになるの

それが最初で、まあこちらも味をしめ

ましてね。やっぱり普通児だけじゃつまらないし、何もしないのに他の子どもたちも協力してくれて、いい結果が出てくるし、その子どもたちも、もう本当に、

あるんだ」「ぜひ、そういうお子さんこそとってあげてください」ということで昨年そのお子さんを取りました。

お断わりした方がその子のためにもいいんじゃないか」とおっしゃられまして、この際勉強してみようと、「けっこうで

何もしなくてもよくなっちゃうわけですね。(笑い) 今年も、ちょっとはきれちやうくらいに多くなつて、これじゃいけない、各園がそれぞれ近くのお子さんをうけ入れてくれないと……と切実に思うんです。

で今年も二人入ったんです。一人は三歳児で女の子さん、もう一人は男の子さんで四歳なんです。遅れというところ、どちらも人から聞いたとおっしゃって……。どちらも徒歩で通園できる範囲内ですので、ただ今幼稚園に来ております。

それまでは、なんにも知識がなかったものですから、一学期間というものは、本当に他の子どもたちにはかわいそうな結果に終わったようなことでしたけれども、夏休みをきっかけにいろいろ勉強いたしました、二学期には、普通児にも、

渡辺 自閉症のお子さんの場合は愛育研究所の依頼でおあずかりしたんです。もう一人、うちの幼稚園はまだ開園三年目でございます、入園時の選考も特にきびしい点もないので、全然口もきけない言語障害のお子さんが偶然応募してきたお子さんの中におりまして、さあ、このお子さんをどうしようか、とやはり問題になったわけです。それで、そういう方面にご相談しましたところ、「現在の教育はそういうお子さんほど、普通のお子さんといっしょに保育することに効果が

横木 私は、それこそたまたま、一年保育を担当させられまして、応募の半分ぐらいしか満たなかったわけです。二十四、五名ぐらいでしたか……。そこへ一人入ってきましたのがちえ遅れのお子さんだったんです。それからもう一人の自閉的なお子さんは二年保育の時にテストをおうけになって、一度落ちたんです。それでもなおうけにいらしたということととりまして、ただその時に主事先生に、

「これはあくまで担任が責任をもって保育しよう、という強い意志がなければ、お断わりした方がその子のためにもいいんじゃないか」とおっしゃられまして、この際勉強してみようと、「けっこうです。」

それまでは、なんにも知識がなかったものですから、一学期間というものは、本当に他の子どもたちにはかわいそうな結果に終わったようなことでしたけれども、夏休みをきっかけにいろいろ勉強いたしました、二学期には、普通児にも、いろいろな意味で、二人のお子さんのいい影響があらわれてきまして、とてもありがたい、ほほえましい場面が、見られるようになりまして。お母さま方にも多少の影響はあったような感じがありますし、子どもたちはやさしい思いやりのあるクラスになりました、私もある意味で成長させていただきました。できましたら、こういう形か、あるいは特殊学級の形か何らかの形で、またやってみたいと思うのですが、なかなか思うようには

◆ 座 談 会

いっていません。

本田 それぞれの幼稚園で、どういう形でそのお子さんをうけいれたかをうかがって見たわけなんですけれども、水田先生、今のご発言お聞きになりながら、お感じになったことはございますか。

この間の、先生の「幼児の教育」の記事にも、ちょっとおふれになっていたように思われますけれども。

水田 私たちのところに来ている子ども

で、遅れてるって、お母さんが気がついていいる場合には、幼稚園に入れる時に非常に躊躇してしまうことが多いんですね。っていうのは、やっぱり試験があれば落とされてしまうだろう、っていうんで、私たちから見れば、もつと積極的

に幼稚園に通ってもいいんじゃないか、

と思うお子さんでも、まあ行かないで我慢してしまうっていう状況、そういう方が見られます。私は「幼児の教育」に幼稚園の試験制度っていうのはどうい

うものかな、ということ、疑問として出してもおっしゃいましたように、幼稚園の選

考制度っていうものが一つの壁である、

そういうものが何かの事情でゆるまったような園には入りやすい、というような状況で、そうでない場合にはやはりむずかしいのではないかな、と考えたわけ

でございます。ただ、さきほど清水先生が「入園テストをしているのだけれども、あえて二回ほど入れたことがある」という貴重なご発言をなさいましたのですが、「あえて」お入れになった、これは園長先生としての一つの何かお考えがござい

ましたのでしょうか。

清水 たのまれたわけです。二、三年前

に入ったお子さんは、少しびっこをひくのと同時にちえ遅れで、他の幼稚園を卒業して小学校へ入る段階だったのです。でも「小学校を一年遅らせた方がいい」として忠告をうけたので、同じ幼稚園に残るっていうのはかわいそうだからなんとかしてあげられないかかってたのまれました。もう一人は五歳児で、それまで特別な治

◆ 座 談 会

と子どもたちはどっちかのかたよった教育しか与えられない。じゃなくて、その子が必要としていけば、その教育がうけられるような、そういう組織ができれば私たちも苦勞することないし、担任の先生も苦勞することない。

私の教育は、難聴の子どもが主力ですけれども、ほとんど普通学級に籍をおきまして、「言葉と聞え」というような面だけ、私たちがみる、というような組織をもっております。これがちえ遅れの子どもにしても、肢体不自由の子どもにしても、全部にそういう教育をうけさせるようになるのと明るいんじゃないか、という気がするのです。

中島 さつき、担任の意志というようなお話があったんですけども、実はぼくがちょうど今あずかっている子どもは難聴で、大体七〇デシベルぐらいなんです。そのぐらいですと普通幼稚園へ行つて、あと難聴教室に週二、三回通つて言葉の訓練なんかすると、割合にうまくや

れるわけなんです。ところが六〇〜七〇デシベルの子がろう学校へ行くとすると、ろう学校では、八〇デシベルすぎの子が多いわけですから、どうしても言葉の環境ってものがあまりよくなくて、周囲の独語とか、身振りなど覚えちゃうんですね。ところがたまたま七〇デシベル

ぐらいですと、幼稚園をろう学校へ通つて、今度は普通小学校へ行くわけなんです。すると、どうも言葉の状態が良くないんですね。どうも言葉の発達が、難聴教室に通つていて普通幼稚園に行つている子の方が一年にあがる時に全然違うわけなんです。

それで、「ぜひ普通幼稚園に入れてください」とお願いした子が一人いたんですよ。そしていぎ入る、という時になったら、今までやっていた先生が年長組をもつことになったんです。すると園長先生は「その人にはまかせられるけど、他の先生にはやれない」というんですね。「だからお断わりします」と。その

子は年少組なんです。担任の先生が、ある程度「私がやります」といってこれれば、園長先生は許可可なすつたんじやないのかね。でも結局、園長先生としては担任に「私はだめです」といわれれば終わりですよ。この幼稚園はこんなぐあいでだめになりました。

前にやはり一人、これは言葉は割によくできた子ですけど、その子が言語教室に通つて幼稚園に行つていたことがあったんです。そこは担任の先生が理解があつてうけいれてくれたんです。園長先生はもちろんですが、むしろ担任の理解の方が大事なんじゃないか、と考えます。

横木 両方の場合が考えられるんじゃないかしら。(笑い)

中島 まあそうですね。もう一つ、さつき河井先生がいわれた、どこかで、たとえば神奈川県療育相談センターなどで管理してもらえんというご発言がありましたね。それはどの程度の管理……

たとえば週に一回、そのセンターに通うのか、それとも月に一回ぐらいでいいのか、あるいはじっと見守っていればいいのか(笑い)そのへんのことについてどうでしょうか。

河井 一応症状を見ていただくということで、週に一回通っているんですけれども、その先生とも親しくして、向うからも来ていただく、私たち子どもにいっしょについて行くこともあるんです。

それからクラスのことなのですけれど、うちではべつに四歳だから四歳のクラスに入れなくてもいい、とってくれる先生のところへ入れるんです。去年私は四歳児もっていたんですけれども、そこに二歳の自閉的な傾向のお子さんがなるべく早い方がいいだろうということ……、いいですね、そういう関係は。

のを考えていかないといけないんじゃないかと思えます。

斉藤 実際は入園テストでね、最近おもしろい問題が起きているですよ。「幼稚園の入園テストに行ったら『お宅のお子さんは言語障害だ。どこか適当な所へ相談に行きなさい』といわれた」というのです。

ね。入園テストを受けたためにそういうわれちゃって、なるほどそういえばそうかなってなもんで、「○○ちゃん、もう一度いってごらんさい、そうじゃないでしょう」ということになっちゃって、かけ込んでいらっしやるお母さんが出てくるんですよ。最近こういう面では非常に無責任だなあと思うんですけれども、他に適した機関があるのでは、というところの裏返しになるんですよ。

巻き返しになって「イヤイヤ、それはいいんだけど適した機関っていうのは、お宅の幼稚園なんだから……」と説明するわけなんですよね。

それから、受けもったことがないっていうのは、私も五年間普通教育をやったあと、五年ほど特殊学級をもちまして、そして言語障害へ入って、その中でも難聴を主とする今の教室に入ってきたものですから、特殊学級の場ばかり歩いてきたんです。それでも、言語障害へ入った時は、実は「言語障害は、どもりと何かな、失語症くらいかな」くらいの知識しかなくて、入ってから「ああなるほど、こういうものなのかな」と見直したわけなんですけれども、やはり私たちが、そういうお子さんを目にした時に考えるのは、今まで過ごした人生の中に、そういうお子さんがいたかな、そういう子どもを扱い方を教えてもらったかな、少なくとも、そういうことについて聞いたことがあるかな、っていうことなんですよ。

◆ 座 談 会

ところが言語障害があり始めたその当時、私たちは実際の生活の中で失語症っていうのは本などで読んだ記憶がある。

それから、どもりっていうのは友だちの中にもいましたから、ああいう話し方は私たちにとっては非常におもしろかったんで、からかったり、真似した経験もあるし、あんまりいい友だちではなかったんですからバツと思いつくわけですね。

それから大学では、私は実はろう専攻でしたので、ろう教育のことについては習ったけれど、それ以外の言語障害っていうのは習った記憶がないわけなんで、やはり考えてみるとこういうお子さんが急にふえたわけではないんですけど、私たちの生活の中でそういう友だちは見つけなかった。そういう友だちがいなかったから、私たちはどう扱ってよいかわからないう、という心配がある。だから裏を返せば、こういう子どもたちを入れることが普通児にもプラスになるんだ、という考え方で私も教育を受けたらそんなに恐

ることなかっただろうし、変な目で見ることもなかったんだし「ああ、あれはあの友だちと同じだ」っていうようなもので、素直に私たちも教師として受けられるという感じをもつんですがね。お母さんたちに特にいつているんです。「家庭でしょいこむな、社会にしょってもらえ」って。

渡辺 でも、お母さんたちはそれを隠すっていうのか、最近では障害児のことについて随分問題にされまして割合大きくローズアップされてきましたけど、今でもやはり人より欠陥をもっていると恥ずかしい、なるべく外に出さないで、ということでも随分遅れてしまったということがありますし、また私のクラスに一人言語障害のお子さんがありまして、そのお母さんはわが子をそれほど重症と認めていなくて幼稚園の入園テストを受け、それがよかったんですけど、最初の面接の時に「家の子は、ちょっと口が遅れているだけです」といったんですね。ところが

が集団生活に入ってみると、全然聞けませんし足はもつれるし、知能検査では二歳の知能位しかないのです。それでも親の方はわかっていたわけですね。

自閉症のお子さんをあずかった時も、最初「どうして気づいたんですか」って聞きますと「保健所で三歳児検診の時に初めて保健所のお医者さんから『ちょっとこの子は言葉がおかしいんじゃないか』といわれ、それまではこの子はおとなしいと思っていただけで、それからあわててあちこち調べてお願いしたりした」っていうことなんですね。ですから、早く気づいて、河井先生のところのように二歳ぐらいから幼稚園に入れたら本当に随分よかったです、三歳までの一番大事な時期に遅れを取り戻すこと、早く発見するっていうことはとても大切だと思います。

河井 その、普通児の中に入れる、ということなんですけど、この間ある先生が普通児の家に家庭訪問に行きましたら、お母様がおっしゃるのに「最初はこんな

幼稚園に入れてシマッタと思った。こんな幼稚園に入れて失敗した」って。「だけど何日かして幼稚園に行ってみたら、親ができないようなことを自分の子どもがそういう子どもたちに本当に親切にやっている。本当に幼稚園の教育っていうのは、こういうことなんだということを初めて知った。本当にこの幼稚園に入れてよかった」とおっしゃっているんだそうですね。そこに普通児との教育のこともあると思うのです。私たちも、子どもも、お母さんたちも理解するっていうことですね。

渡辺 担任だけでなく、園全体の先生方の理解が大切ですね。うちの幼稚園では一応クラスは決まっていますが、三歳の、今年入った言語障害のお子さんが、一日中あちこちの室にいたり、そして昨日なんかも笑ったんですけれども、年長の子がタイヤがずつとつなげてあるところを馬跳びをやっていた。その真中に三歳の言語障害のお子さんが入っちゃった

わけなんです。年長はどんどん跳んで行きますね、ところが私がひょつとろを振返つたらずつと間があいてるんです。もしたら、その子が真中に入つて一つ跳んでいくのを、ずつと行列で待っているわけなんです。もちろんその子は私のクラスの子じゃないんですけども、そういうことで園全体の先生が暖かくその子どもたちを見守ってあげるところに、より以上の方法があると思うのですね。どこのクラスに行っても邪魔にしない、ということでも幼稚園中駆け回っております。

本田 今、中島先生は担任の先生の理解の必要ということ、横木先生は園長の理解がないということ、そして今の渡辺先生からも園全体の協力というように

とが述べられました、園全体で、障害をもったお子さんを受け入れることの重要性が出されたわけですが、河井先生のところは、お話をうかがっておりますと受け入れたくない、と

いう感じがするんですけれども(笑い)まわりの受け入れ体制はできているのでございますか。

河井 父が園長ですし、母がいばっておりますし、私の先生たちには何もいわさずにやっているの先生たちには何もいわさずにやっておりますし(笑い)。一言でいえば、先生を受け入れる時に、こういう子どもにも理解を、と、ということでも最初から決めていましたので、そういうことで勉強したくない、という先生たちばかりでございますから。ああいう子どもたちを理解できる先生というのは、大体普通児に対してでも大変理解があるわけなんです。子どもはとつても幸せだと思っております。

本田 いかでございましょうか。今大変おもしろいお話が出ておりますが、ご質問なり、今後取り組むべき課題をお考えの先生方からのご意見なりございましてらどうぞ……。

本田 いかでございましょうか。今大変おもしろいお話が出ておりますが、ご質問なり、今後取り組むべき課題をお考えの先生方からのご意見なりございましてらどうぞ……。

◆ 座 談 会

中島 何にも知らないで入っちゃう場合、案外うまくいく場合があるんじゃないかと思うんです。僕が小学校のころなみですけど、時間中出て歩いて時計がすぐく好きな子がいたんですよ。今考えてみると自閉症だったんじゃないかと思うんです。当時、時計が校長室にしかなくて、時々中に入って何時間でも時計を見ているらしいんですよ。それから、夏なんかは先生が授業やってると後から入って来てグルッとまわって先生の前を歩いて、また出て行くんです。学校中歩いているんですね。ところが先生方皆、おもしろいっていうんです。授業の邪魔にはならないし、ただ通るだけです。それでなんとなく受け入れられて自由に教室だとか廊下なんか歩いているのを記憶しているけれど、これだっけ初めから自閉症とかなんとかいわれたら、ちょっと受け入れてくれなかったと思うんです。知らないから入ってきたというんです。

その後、その子が大きくなったらそのようなことがなくなったということで、ぼくの組じゃないからわからないんですけど、いつの間にか回って来なくなったというので。だから同じようにレッテルを貼っちゃうとダメというようなことがあるんじゃないでしょうか。

本田 ただいまのお話、津守先生が大変お好きそうな話題だと思えますが、いかがでしょうか。

津守 そうですね。その通りだと思えます。あまり早期に発見しすぎると問題があるんです。発見することによって、その後の責任がもてるのはよいけれど、そうじゃない場合、発見することがただレッテルを貼って分類することだけに終わってしまいますからね。

斉藤 やっぱり幼稚園は、たいていどこでも入園テストがあるっていうんですが、入園テストは選抜のためのものですか。

横木 まあそうですね。ただ幼稚園とし

ては辛いことは辛いんです。問題のお子さんが見えた時に何を規準にして見るか……。それから古い幼稚園になりますと、きょうだい、いとこ、はとこ、いろいろありましてね。本当にガラガラボンとクジでやるのか……。何か、それだけでもちょっと決まりのあるものを、というので……。

斉藤 私のところにいた子どもで、うまく幼稚園へ入ったんですけども、私の方からいろいろ幼稚園へ連絡するのを親の方で誤解されるんですよ。「どういわけか」って聞いたら「あまり手がかかることがわかると出されちゃう。園に『うちの子はこういう状態なんですよ』という『いつでもお引き取りください』といわれそうで、入れてもらえただけ幸せだから寝た子を起こさないでください』っていうことなんです。幼稚園に何しにいらっしやられるのか(笑い)。私たちのつもりとしては、担任の先生にお子さんの扱い方をよりスムーズにしてい

ただければ、先生の方はむしろ楽ではな
いかな、とお伝えしたいわけですよ。

私たちよく小児科の医者に責められる
んですよ。たとえば脳波の異常がでると
小学校は受け入れてくれない。すると私
たちみたいに特殊教育をしている者に

「先生っていうのは一体どういうわけな
んだ。脳波の異常があるからこのお子さ
んはとても無理だといわれるけれど、よ
く見ていたら脳波をやったら異常が出る
んじゃないかっていう子はちゃんと入っ
てるのに、脳波の異常ってことだけで断
わられるのはどういうわけなんだ」と。

そういう意味では、名前がつくと非常に
重たく思われ、そうでないと案外受け入
れられる。というに出くわします
ね。実は、私たち自身教職にすることで
責められることがよくあるんですよ。

中島　そういう時には、僕はちょっと嘘
をつく時があるんですよ(笑)。普通学
級の先生は補聴器っていうのはよく知ら
ないですよ。だから「難聴なんだだけ

でも補聴器つけてれば何でもよく聞える
から」というと本当にそう思っちゃう
んです。そうして少したってから「こう
いうことはオレはどうも」と出て来る
んですよ。それでも入ってすこしたつと
子どもとのラポートがつくでしょ。そう
すると「ダメッ」という先生はあまりい
ないですよ。よほど気が合わないかぎ
り、たいていはそのままうまくいっチャ
うですよ。

初めから大変なんだという印象を与え
ちゃうと本当に大変になって、たとえば
入学試験の時、健康診断が終わってから
子どもを教室の一番前に座らせて、五、
六人の先生がかわりばんこに教壇のどこ
ろでお話をして「聞こえたか? 今何が
聞いたの」といわしたというような話を聞
いているんですよ。それでよくいえな
かったそうです。皆さん経験もあるし、多
少知識もあると喋っていいんですよ、
だから現状ではごまかすことくらいしな
いと小学校でもすんなり受け入れてくれ

るところがほとんどないといってもいい
んじゃないですか。そういう点で、われ
われは小学校の先生に対する啓蒙なんか
が必要だと思うのですが、なかなかそこ
までいけません。

齊藤　私たちは「普通のお子さんたちと
いっしょに生活する場、遊びの場を与え
てくださることが、お子さんにとっては
最大の教育になっているのだから、担任
される先生がこの子のためにどうい
くつてもいいんだ」というんですよ。

「おいてくださるだけで一番の教育にな
るし、家庭にも近隣にもない、その子の教
育の場になるんだから、とにかくその場
を与えてください」とお願いしているの
です。とにかく言葉が不自由ですから、
やはり何かの手本がいるわけなんです。
言葉がまずいからこそ、よい言葉を十分
に聞かせられる、刺激を与えられる、と
いうことだけ随分その子にプラスになる

◆ 座 談 会

わけなんです。「見守ってください。見るだけでいいんですから、なんとか入れてください」とお願いするんですがね。

先生方非常にまじめでいらっしゃるの
で、お子さんにプラスになることをして
やろうと考えられるのですが、それが必
ずしも子どもにとってプラスになるとは
かぎりませんよね。

横木 最初二人受けもちまして、一学期
が、今おっしゃった状態だったんです。

でも二学期になりまして子どもたちの様
子を見ていて、障害のある子をもった担
任の役割は、その子に働きかけるのでは
なくて周囲への働きかけなのではない
か、と思いました。

斉藤 さっき中島先生もいいましたよう
に、同じ聴力の子どもでも、ろう学校の
幼稚部に入れた子と、普通の幼稚園に入
れてある程度私たちの方で見ている子ど
もと、まるっきり質が違うのですね。ろ
う学校の幼稚部にいるところの子の真似
をしてしまっ、聞こえることがマイナ

スに働いちゃうんですよ。ですから極端
にいて「ろう学校は逃げないから、い
つでも待つてから普通のお子さんたち
といっしょに生活させてみる、それでど
うしてもハンディがひどすぎてお子さん
にマイナス面ばかりが強いならば、ろう
学校に変えてみる」と考えるのです。初
めからろう学校に入れることは、お子さ
んにとってよくないですね、やはり周囲
の環境は非常に強いですよ。

河井 うちの場合ですと、去年、普通幼
稚園から普通小学校へ入った自閉的傾向
をもつお子さんがあって、その子は一年
ゆうよしたわけですが、なにせピアノが
じょうずで、何だっって弾いちゃう大変な
特技の持主なんですけれど、そのお子さ
んを小学校に上げる時に、特殊学級とい
うこと考えたのですが、環境って大切で
すから、普通学級に入れてみましょう、
ということではいろいろ働きかけ、寄留に
して、うちの幼稚園の近くへ入れたわけ
です。いつでも、幼稚園へ戻って来

ていいから」ということで斉藤先生がお
っしゃったような形で小学校へ入りまし
た。ここ何日か、少しいやがったらしい
んですが、昨日「きょうは帰りに幼稚園
へ来て、とてもきげんだった」という
ことで安心しております。

本田 ただいま、先生方から普通幼稚園
での受け入れ体制のことが話され、障害
をもった子どもも、普通の子どもと何ら
変わることはないんだ、ということが
出されましたが、ちえ遅れの子どもの保
育にたずさわっておられる水田先生、川
島先生いかがでございますか。

水田 お母さんたちが私たちのところへ
来て一番感ぜさせるのは「こういう子ど
もたちは、どういうことをしたらよくな
りますか、どういうオモチャがあります
か、どういう遊ばせ方がありますか」と
かいわれるのですね。そんなものは絶対
ないですよ。「あなたのお子さんは普通
と同じです。普通に扱ってればいいんで

す。他の子どもとちっとも変わりませ

ん。その子どもがやりたいことを十分にやらせてあげれば子どもが自分から伸びていくんです」っていうんですね。

私たちも実際に保育をしていて、何かをやったのだ、ということとはとても思えないですね。私は、たまたま遅れた子どものグループをやっていますけれど、普通の幼稚園と同じことをやっていると思うのです。普通の幼稚園で遅れた子どもを受け入れるのを躊躇するのは、そういう子どもをたまたま知らないだけじゃないかと思うのです。受け入れて、つきあって見れば少しも違うないことを皆さんわかってくださると思うんですね。だから、どんな子どもであっても、まわりを整えておとなが見てあげれば、子ども自身がそれなりに伸びていくし、それが一番いいことじゃないかな、と感じています。

川島 私も子どもを扱っておりまして特別な子を扱っていると意識したことがありません。でもいらっしゃるお母様に対

して「全く普通の子と同じだから」といえないくなるんです。というのは、お母様たちは社会の人々の見方や価格基準をいつも気にしていまして「どうしたら良くなるでしょうか」と聞かれるんです。子どもさんに何をしよければよいか本当はわかっていらっしゃるのに「もっと普通の子に近づいたための何かを」と考えてしまっているんですね。それで、障害をもった子どもを含めた幼児教育が、もつとなされていけば、親の苦痛は半減するわけなんです。今の幼児教育は、本質的なものからあまりにも離れていることに気づかされております。

横木 個人の気持とは別に、幼稚園側の苦しさをちょっとお話ししてみたいと思います。お茶大の附属幼稚園のように本当

に自由保育をしていらっしゃいますとやりやすいんです。でも、ほとんどの幼稚園が一斉保育で、私立で、場所が非常に狭くて、限られた所で、限られた方法でやっているわけなんです。私のクラス

では年少組三十六人で、それを一人でやっているわけなんです。そこへ受け入れるとなると本当に大変なんです。ですから、他の子どもたちがおちついたところ受け入れてあげるとか、あるいは、レッテルを貼るという意味で望ましいことではないかもしれませんが、五、六人の障害のあるお子さんを一グループにして応接室のような所で、慣れた先生が、その子たちに合った保育をする、そして遊び時間を他の子たちといっしょにするとか、ある時は普通児の一斉保育の中に入れる場をつくるとか、いろいろ考えられますけれども、現実には一斉保育の中では苦しいことをわかっていただきたいと思えます。

本田 ありがとうございます。今、大変現実的なお話を伺うことができて非常に多くの考えなければならぬ問題が提起されたと思います。たしかに障害をもった、忘れられている子どもたちを普通の子どもとして受け入れていくこと

◆ 座 談 会

は両方の子どもにとって大切なことである。

りますし、またそれを実現させるためには多くの問題が残されております。このへんで、津守先生、まよめのようなお話をしていたいておしまいにしたいと思

も、うんと遊べるような幼稚園が要望されてい

と思います。
本田 教育機関に適した子どもじゃなくて、それぞれの子どもに適した教育の体制をつくりあげていくこと、このことをきょうの結論のようなものにさせていただきます。この座談会を終わりたいと思

います。

津守 今お話をうかがっておりまして考

わ

えたことですが、現状ですと「普通

す。どの子どもも、こういう時代の中

でもありがどうございました。

通の幼稚園で受けられるよりも、もっと

ももっととうんと遊べるような幼稚園

にしてい

適した教育機関で受け入れたいので

うような話題に触れてくるような気がす

るわけ

は「ないか」ということが、すぐ返って来

るわけ

れ

ることがわれわれが一番経験しているこ

も

も

すと、今の幼稚園がもっと組の人数が少

う一方、どの子どもも教育を受けるとい

うこと

なくならないかと思うんですね。人数が

うこと

も

少なければその遅れた子にとっていい

適した教育であって教育機関に適した子

ども

というだけじゃなくて、全部の子どもに

ども

も

とっていいわけになるんで、そうすれば

も

も

問題は随分解決することは目に見えてい

どの子どももその子に合った教育を受け

るよう

るとい

るよう

だ